

出品作家略歴

【池田満寿夫—1980-1990 年代の版画を中心】

池田満寿夫（いけだ・ますお、1934-1997）

旧満州國奉天（現・中国遼寧省瀋陽）生まれ。1945 年に終戦のため引揚げ、長野市に移る。上京し、55 年に豊嶽らとグループ「実在者」を結成。翌年にデモクラート美術家協会に参加し、色彩銅版画の制作を開始。国際版画展で受賞を重ね、66 年ヴェネツィア・ビエンナーレ版画部門大賞を受賞。前年には日本人として初めてニューヨーク近代美術館にて個展を開催した。文筆にも優れ、77 年小説『エーゲ海に捧ぐ』で芥川賞受賞。陶芸・映画等の分野でも幅広く活躍した。

【アーティストの肖像】

関根正二（せきね・しょうじ、1899-1919）

福島県生まれ。1908 年に家族で上京、深川区に住む。12 年、伊東深水の紹介で東京印刷会社図案部に勤め、はじめ日本画を学び、のちに洋画に転じて本郷洋画研究所で学ぶ。信州旅行の際に河野通勢に出会い、強い影響を受ける。15 年、第 2 回二科展で《死を思ふ日》により初入選。18 年の第 5 回二科展で《信仰の悲しみ》などを出品して橋牛賞を獲得するも、翌年 20 歳の若さで没した。

河野通勢（こうの・みちせい、1895-1950）

出生地については、長野県上水内郡長野町（現・長野市）とする説と、群馬県伊勢崎市とする説がある。早くから師範学校の画学教師であった父・次郎の熏陶を受け、旧制長野中学（現・長野高校）卒業後に第 1 回二科展に出品し、初入選。1917 年に上京すると、岸田劉生らと交遊し、草土社同人となった。のちに春陽会、大調和会、国画会等で活躍。独特の細密描写で大正期の洋画界に異彩を放った。

島崎鶏二（しまざき・けいじ、1907-1944）

東京生まれ。島崎藤村の次男。1920 年より川端画学校で洋画を学ぶ。26 年に半農半画家の生活を目指して馬籠（旧・山口村）に移り住み、兄の楠雄とともにおよそ 3 年を信州の地で過ごした。28 年に第 15 回二科展で初入選。渡欧作の《紅衣の女》が第 18 回二科展に特別出品されるなど、二科会を中心に活動を続けた。第二次世界大戦中、

従軍先のボルネオ島東海岸タラカン島付近で飛行機事故により夭逝した。

東郷青児（とうごう・せいじ、1897-1978）

鹿児島県生まれ。本名は鉄春。幼年時に家族で上京、中學在学中に絵画を学び、1916 年の第 3 回二科展で《パラソルさせる女》が初入選、二科賞を受賞、前衛絵画の先駆けとなる。21 年に渡欧、ダダイズムや未来派の運動に触れ、パリを拠点に制作を行う。28 年の帰国後も二科展での活躍を続け、38 年に結成された九室会の顧問に推挙される。戦後は二科会の再建に努め、61 年には会長に就任する。57 年に日本芸術院賞を受賞、後に会員となる。76 年、勲二等旭日重光章、78 年、文化功労者。後年は甘美な女性像を特徴とした様式を確立し、また国際的な文化交流にも尽力した。

有島生馬（ありしま・いくま、1882-1974）

神奈川県生まれ。本名は壬生馬。兄の武郎は文学者、弟の里見淳は小説家。1901 年に東京外国語学校伊太利語科入学。卒業後は藤島武二に師事。翌年渡欧し、イタリア、フランスで学ぶ。10 年に帰国した後は文芸誌『白樺』の創刊に参加、セザンヌらポスト印象派を日本に紹介した。14 年の二科会創立に尽力するも、35 年に帝国美術院会員となり脱退。翌年に一水会を結成。疎開していたことが契機となり信州新町に住居が移設され、82 年に記念館として開館した。

石井鶴三（いしい・つるぞう、1887-1973）

東京生まれ。父の鼎湖、長兄の柏亭はともに画家。不同舎に入り小山正太郎に学ぶ。1905 年に東京美術学校へ入学し、1911 年の第 5 回文展に入選。13 年に研究科を修了したのちは日本美術院研究所で学ぶ。15 年の再興第 2 回院展に《力士》を出品し院友となる。日本美術院を中心に戯刻家として活躍する傍ら、創作版画協会の設立に携わり、また新聞小説の挿絵を手掛けるなど多彩な活動が知られる。

菊池一雄（きくち・かずお、1908-1985）

京都生まれ。父は日本画家の菊池契月。1928 年、藤川勇造に師事。30 年から 34 年にかけて二科展に出品。36 年から 3 年間渡仏し、デスピオに学ぶ。帰国後は、新制作

派協会の会員となり出品を続けた。47年に京都市立美術専門学校彫刻科教授となり、52年からは東京芸術大学で指導した。戦後の具象彫刻を代表する作家として知られ、『自由の群像』(1955年、東京・千鳥ヶ淵公園)や『原爆の子の像』(1958年、広島平和公園)など屋外彫刻を多数制作している。

【松本竣介とその周辺】

小熊秀雄（おぐま・ひでお、1901-1940）

北海道生まれ。1922年に旭川新聞社に入社、紙上で童話や詩、小説を発表する。28年に再上京すると、31年にプロレタリア詩人会に参加。34年に詩誌『詩精神』を創刊、翌年「小熊秀雄詩集」、「飛ぶ橇」を出版する。39年、『現代文学』を創刊するも、翌年肺結核で死去。豊光や松本竣介ら若い芸術家たちが集った「池袋モンパルナス」の中心的存在であり、詩作の傍ら、画論や素描も手掛けた。

野田英夫（のだ・ひでお、1908-1939）

アメリカ合衆国カリフォルニア州生まれ。3歳の時に日本での教育を受けるために帰国し、1926年再渡米。カリフォルニア美術専門学校にて学んだのち、ニューヨーク北部のウッドストック芸術村に住む。国吉康雄らと知り合い、またアート・ステューデンツ・リーグでディエゴ・リベラの壁画制作の助手を務める。以後、壁画、テンペラ画の研究を続け、アメリカン・シーンを代表する日本人作家の1人として、大恐慌以後の未曾有の不況に陥ったアメリカにおける庶民的生活を描き続けた。

松本竣介（まつもと・しゅんすけ、1912-1948）

東京生まれ。旧姓は佐藤、本名は俊介。幼少を岩手県花巻、盛岡で過ごす。盛岡中学時代に聴力を失う。画家を志して1929年に上京、NOVA美術協会や前衛グループ・九室会に参加する。43年、豊光、麻生三郎らと新人画会を結成する。戦中は美術雑誌『みずゑ』に「生きている画家」を寄稿、また自画像や人物構想画にたくして当時の国家による文化統制に異議を唱える。戦後は自由美術家協会に参加。清澄な抒情に満ちた内省的な都会風景を中心に、独自の絵画を探究した。

豊光（あいみつ、1907-1946）

広島県生まれ。本名は石村日郎。1925年に上京、太平洋画会研究所で学ぶ。翌年の二科展で『静物（ランプのある静物）』が初入選、38年の独立美術協会展では『眼のある風景』により協会賞を受賞する。39年、斎藤義重や福沢一郎らと美術文化協会を結成。43年には麻生三郎、松本竣介らと新人画会を結成するも、翌年に召集を受け大陸へと渡り、戦後上海にて戦病死した。激しい筆致、あるいは細密描写によってイメージに迫り、幻想的な光景を現出した。

鶴岡政男（つるおか・まさお、1907-1979）

群馬県生まれ。1922年、太平洋画会研究所に入る。28年の1930年協会展で入選すると、30年にNOVA美術協会を創設する。43年の新人画会の結成にも参加、戦後は自由美術家協会会員となる。53年の第2回サンパウロ・ビエンナーレに出品。以後も日本国際美術展や現代日本美術展で受賞し、79年、群馬県立近代美術館で回顧展が開催される。ユーモアや批判精神に満ちた作品により、社会の現実、そして人間存在へと迫った。

【冬に挑む】

鈴木芙蓉（すずき・ふよう、1752-1816）

信濃国伊那郡北方村（現・長野県飯田市北方）生まれ。本姓は木下。号は芙蓉のほか、文熙、雍熙、老蓮など。1767年ごろ江戸に上ったと伝わり、渡辺玄対と湊水に画を、また林家で儒学を学んだ。96年からは元徳島藩儒であった柴野栗山の紹介により、徳島藩御用絵師に登用される。谷文晁や渡辺崋山と並ぶ江戸南画の主要作家であり、新興画派の形成に大きな役割を果たした。漢籍や中国画に造詣が深く、その学識に基づく多様な作品を遺している。

小坂芝田（こさか・しでん、1872-1917）

長野県伊那郡小沢（現・伊那市）生まれ。本名為次郎、名は道晴、字は子順。1888年に児玉果亭の画塾・竹仙山房で南画と書を学ぶ。90年に上京し、従兄にあたる中村不折と同居。日本美術協会、日本画会などに出品し受賞を重ねる。1906年に山岡米華らと共に日本南宗画会を創立。山水を得意とし、文展では第2回展から連続して受賞。11年には画塾・積翠山房を開設し、後進の指導にあたった。

菱田春草（ひしだ・しゅんそう、1874-1911）

筑摩県伊那郡飯田町（現・飯田市）生まれ。本名は三

男治。画家を志して上京し結城正明に師事、1890 年に東京美術学校第 3 期生として入学。95 年同校卒業。岡倉天心、橋本雅邦の指導を受け、98 年日本美術院の創立に参画する。横山大観、下村觀山、西郷孤月とともに「雅邦門下の四天王」と呼ばれ、古画と洋画の研究を通して日本画の革新に尽力した。初期文展に出品し、受賞を重ねるも病に倒れ、36 歳で夭折。

西郷孤月（さいごう・こげつ、1873-1912）

筑摩県松本（現・松本市）生まれ。本名は規。1889 年、東京美術学校第 1 期生として入学し、橋本雅邦に師事。研究科修了後の 96 年には同校助教授となるが、98 年に岡倉天心らと共に辞職。同年、天心と雅邦率いる日本美術院に参画し、横山大観や菱田春草、下村觀山と共に「雅邦門下の四天王」と呼ばれる。97 年第 3 回絵画共進会で銅牌一席となる。院展の俊秀として将来を期待されたが後に日本美術院を離れ、諸国放浪の後、病に倒れ夭折。

金山平三（かなやま・へいぞう、1883-1964）

兵庫県生まれ。東京美術学校で黒田清輝の指導を受ける。同校を首席で卒業後、1912 年渡欧、パリのアトリエを拠点に各地へと写生旅行し、帰国後 16 年の文展で《夏の内海》が特選を受賞。35 年の帝展改組に伴い結成された第二部会に参加するが、翌年の分裂後は画壇から離れる。44 年、帝室技芸員に任命。戦後は日本芸術院会員に任命され、日展顧問も務めながら、絵の具を混ぜずに、大きな筆致で光を捉えた風景画を数多く残した。

倉田白羊（くらた・はくよう、1881-1938）

埼玉県生まれ。親戚の浅井忠に入門した後、東京美術学校で学ぶ。同校を首席で卒業すると、教職や時事新報社での勤務を経て、美術雑誌『方寸』の編集に携わる。このとき親しくなった小杉未醒、山本鼎、森田恒友との親密な交遊から、1915 年院展洋画部に加わり、22 年の春陽会の創立にも参加する。同年上田市に移住、農民美術運動の指導を行なった。晩年は持病の糖尿病が悪化し、右目を失明しながらも絵を描きつづけた。

田村一男（たむら・かずお、1904-1997）

東京生まれ。1924 年、本郷洋画研究所に入所。同年、研究所で知り合った彫刻家・矢崎虎夫の実家に近い蓼科

高原を訪問、信州の雄大な自然に感銘を受け、信州の山岳や高原を多く題材にするようになった。28 年、《赤山の午後》で帝展に初入選。31 年の第 18 回光風会展での入選により、画家の道を決意し、以降光風会展や日展に出品。80 年、日本芸術院会員となると翌年には光風会理事長に就任。92 年、文化功労者に選ばれた。

【池田満寿夫のアトリエより】

泉茂（いずみ・しげる、1922-1996）

大阪生まれ。大阪市立工芸学校卒業後、大丸宣伝部に勤務する。兵役を経て戦後に退社、瑛九と出会い、1951 年にデモクラート美術家協会の設立に参加する。57 年、第 1 回東京国際版画ビエンナーレ展で新人奨励賞を受賞、第 4 回サンパウロ・ビエンナーレにも出品を果たし、翌年には日本版画協会会員となる。59 年に渡米すると油彩画にも本格的に取り組み、それまでの叙情的なイメージから抽象画へと移行する。63 年にパリへ移住、ヨーロッパ各地で個展を開催し、68 年に帰国後は大阪芸術大学で後進の指導にあたった。

北川民次（きたがわ・たみじ、1894-1989）

静岡県生まれ。1914 年に大学を中退し渡米、アート・ステューデンツ・リーグに入学する。卒業後はメキシコへと向かい、野外美術学校に教師として赴任、後にタスコの美術学校の校長となる。36 年に帰国、第 29 回二科展に出品し会員に推挙される。戦後は児童美術教育の実践に注力し、52 年の創造美育協会の創設に携わる。78 年、二科会会长に就任するも直ぐに辞し、翌年には退会する。86 年、アギラ・アステカ勲章を受章。メキシコ壁画運動や児童画の影響を受けた、素朴かつ生命力に満ちた作品群を手掛けた。

深沢幸雄（ふかさわ・ゆきお、1924-2017）

山梨県生まれ。東京美術学校彫金部で学び、卒業後は県立市原高等学校で美術教師として勤務する傍ら、作家活動を続ける。50 年代に油彩画から銅版画へと転向し、57 年に第 25 回日本版画協会賞を受賞、以後も春陽会賞など受賞を重ね、65 年の第 8 回サンパウロ・ビエンナーレに出品する。86 年、多摩美術大学教授に就任、87 年、紫綬褒賞、95 年、勲四等旭日小綬章。メゾチントを中心に生涯を通じて多様な技法を追求した一方、メキシコの版画界の技術向上にも貢献し、94 年にアギラ・アステカ勲章を授

与された。

【松井康成の世界】

松井康成（まつい・こうせい、1927-2003）

長野県北佐久郡本牧村（現・佐久市）生まれ。本名は美明。1957 年に茨城県笠間市の月崇寺住職となると、60 年に同寺内に窯を開き、中国や朝鮮、日本の古陶磁を研究。68 年から田村耕一に師事し、田村の助言で練上の技法に特化して翌年の伝統工芸新作展で初出品、奨励賞を受賞する。73 年の日本陶芸展では最優秀作品賞・秩父宮賜杯を受ける。93 年に重要無形文化財「練上手」保持者（人間国宝）に認定される。